

長崎県版 目次

心を育てる道徳教材集

1	愛は命を支える柱になる	2
---	-------------	---

長崎っ子に贈る50の話

2	「お地藏様の市」に学ぶ	6
---	-------------	---

3	一冊の文庫本	8
---	--------	---

4	たったひとつの歌でさえ	14
---	-------------	----

情報モラル指導教材及びトラブル対応マニュアル

5	掲示板荒らし	20
---	--------	----

1 愛は命を支える柱になる

私の妹は今、かわいい天使になっている。名前は麻央^{まお}。両親が本を何冊も読んで決めた名前だ。

麻央が生まれたのは三月三日、ひな祭りの日だった。麻央は、染色体の異常から起こる病気と心臓疾患^{しつかん}を伴う^{ともな}病気とをもって生まれてきた。九十九パーセントは流産になることが多い。でも、麻央は一パーセントの確率^{りつ}で生まれてきたのだ。両親は病院の先生から、

「すごい生命力です。よほど皆^{みな}さんに会いたかったんですね。」

と言われたそうだ。しかし、「長くて一ヶ月の命……」とも言われていた。

麻央はとっても小さくて、心臓だけが強く動いていた。目がクリクリしていて、悲しい時や痛い時は、泣いて意思表示をはっきりする子だった。麻央の泣いた顔や、いろんな顔を見るた

びに胸がキュンとした。そんな気持ちになるのは生まれて初めてだった。

両親は、麻央にできる限りのことを最後までしてあげようと決心し、病院から家につれて帰った。じいちゃん、ばあちゃん、親せきの人たちみんなが麻央の様子を毎日見にきてくれた。ほんとうにたくさんの人から愛情をもらった。もちろん、私たち家族もたくさん麻央を愛した。

あつというまに、三か月の日々が過ぎていた。一か月だと言われていた麻央は奇跡^{きせき}を起こしていた。一日一日、必死で生きていた。しかし、たびたび具合が悪くなり、病院に行くことがあった。そのたびに私は不安になり、誰^{だれ}にも見られないように、トイレやお風呂で一人隠^{かく}れて泣いた。自分が代わってやりたいと思った。自殺があったというニュースをテレビで見えると思った…。

（その命、麻央にちょうだいよ！）



そして、五か月……。だんだん便や尿^{にょう}が出なくなり、水分が体から出ないため、麻央の手足がはれはじめてきた。チューブで口から与えていたミルクも入らなくなり、顔色が悪い日が続いた。苦しそうな声を出す麻央。つらかった。

八月十七日、麻央はかわいい天使になった。息をしない麻央を病院から家につれて帰るとき、温かった麻央の体がだんだん冷たくなるのを感じた。

（これが命なんだ。）

そう思った……。苦しくなった。息ができなかった。でも私以上につらいのは両親だったと思う。母は今まで麻央にどんなことがあっても涙を流さなかった。だけど、その時だけは麻央を強く抱きしめて激しく泣いた。私も泣いた。

麻央のお葬式^{そうし}の日、あるおばあちゃんが、私にこう話してくれた。

「あなたたちがいっぱい愛したけん、五か月も生きられたとよ。」

そのことを言われるまで私は、麻央に何もしてあげられなかったことをとても悔^くやんでいた。しかし、その一言で気がついた。

（私の…私の愛で麻央の命を少しでも支えることができたんだ！）

うれしかった。

最近、命を軽く見た事件がたくさんある。絶対に誰^{だれ}かに愛されているはずなのに、命を粗^そ末^{まつ}にしてしまう。私は麻央が生きた意味を無駄^{むだ}にしたくない。命を粗^そ末^{まつ}にする人が少しでも減ってほしい。命の尊さ、大事さをわかってほしい。

そして思う。

人を愛そう！

愛は命を支える柱になるから。

（長崎県 鹿町中学校 生徒作文から）

2 「お地藏様の市」に学ぶ

八月二十四日は、祖父母の家でお地藏様の市といって、子供達の手でお地藏様をまつる行事があります。近所の幼稚園児から中学生まで、この日を楽しみにしています。

今年のお地藏様の市は、雨にもかかわらず朝早くから二十人ぐらいの子供達が押しかけ、みんな、頭からぬれながらも一生懸命協力して周りを掃除したり、きれいに飾ったりしていました。午後からは、男子が箱を持って一軒一軒、志を受け取りに行き、女子は、お参りに来る人に渡すおだんごを作りました。小さな子が、手をあずきたらけにしながら、「何だか、働きに行ってるパパの帰りを楽しみに待ってるママの気分よ。」とおしゃまに言っ、その場のムードを和ませていました。

夕方になると、お参りに来られる人も増え、私達はお茶とおだんごを配るのにてんてこまい。男子は、太鼓を持って声をからしながら、さかんに呼びかけています。しかし、今年は午前中雨だったせいかな、お参りに来る人の数は例年より少なめでした。

男子は、かなり疲れたらしく、何かおもしろいことはないかな、ということ、おさい銭箱に細工を始めました。箱の中の十円玉を取り出し、百円玉ばかりにするのです。そうすると次から来る人も百円玉。どんどんお金もたまるという考えなのでしょう。

ちようどそこへおばあちゃんがお参りに見え、おさいふの中を見ているけれど、十円玉しかないらしく、さっとお参りして、おだんごも受け取らず、曲がった腰をより曲げて逃げるように帰って行きました。男の子達は顔を青くして、そのおばあちゃんを追いかけました。私たちもついて行きました。おばあちゃんはとても喜ばれて、目に涙をためて「あんた達にきれいにしてもらってお地藏様もさぞ、お喜びでしょう。」と頭を下げるのです。私たちは、自己嫌悪でおばあちゃんをまともに見る事ができませんでした。それを見ていた近所の高校生のお兄さんが「このお祭りは何のためにするのか知つとるや。日頃お前達を守ってくれるお地藏様に、今日は感謝する日だぞ。」と、さり気なく注意してくれました。

私達は、自分達だけでこのお祭りをやってるんだ、という考えがあつたようです。しかし実際は、いろんな人の協力で行われているのです。そうでなければ、五十年以上も続くわけがありません。私達が疲れたところに、手作りのケーキを持ってきてくれるおばさん。「おだんご、おいしかったよ。」と言ってくれる人。小さな子供に、「頑張れよ。」と頭を軽くたたいて、はげましてくれる人。そういう人々に支えられて、私達が続けていけるのです。こんな時は、人のやさしさなどつくづくありがたいな、と思います。私にとって最後の参加になりましたが、このお祭りで行ういろんなことを学びました。お地藏様の市、是非とも続けていってもらいたいと思います。

3 一冊の文庫本

青来 有一

宮沢賢治^{みやざわけんじ}の童話を讀んだのは、十七歳^{さい}の頃^{ころ}だった。高校二年生。大人になりかけの年齢^{れい}だ。十七歳^{さい}にもなればからだはすっかり骨^{ほね}ばって、髭^{ひげ}も生え、声も太くなる。からだの変化に心がついていかない。ようやく、からだの変化を追って、心がぎしぎしときしみながら、かたちを変えていこうとするぐらいの年齢^{れい}だ。見た目には、童話を讀むには、ちよつとばかりむさくるしい姿^{すがた}だったかもしれない。

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩は、小学校の教科書に掲載^{けいさい}されていた。授業で暗唱^{あんしょう}させられたのでだいたい覚えていた。

「雨ニモマケズ」というこの詩（ほんとうは手帳^{てちょう}に記入したメモのようなものらしい）は、だれもいちどくらいは讀んだことがあるかもしれない。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾^{よく}ハナク

決シテ瞋（イカ）ラズ

イツモシツカニワラツテ忪（イ）ル

最初からこのあたりまで、ずいぶんと立派な人をほめたたえた詩かと思ったが、ずっと読んでいくと最後はこんなふうにもすばれている。

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

「そういう者にわたしはなりたい」という最後の二行の願いは、詩のいちばん頭から終りあたりまで全編にかかっている。

雨にも、風にも、夏の暑さにも負けない人間になりたいというのはわかる。丈夫なからだをもちたいと願うのは、だれだってそうだろう。でも、デクノボーと呼ばれて、誉められもしないで、苦にもされない人間になりたいとは、いったいどういうことなのか。

宮沢賢治とはどんな人だったのか。

ずっと心の中にそんな疑問はかかえていたような気がする。疑問というよりも、興味^{きょうみ}だろう。とにかく宮沢賢治という名前はなんとなく胸にひかっていた。でも、心の準備がまだだったのか、あいまいなまま時は流れていった。

中学生になり、高校に進学した。だんだんと本を読むようになったのは、やはり、心がぎしぎししみながら成長していこうとしていたのだろう。からだの成長のためにはバランス良く食べて、運動をしなければならぬ。同じように、心の成長にも栄養と運動が必要だ。たぶん、読書は心の運動であり、活字は心のごはんでないか。しかも、いくら食べてもなくならない。本はなかなかお得な栄養源ではあるのだろう。

高校二年生のある放課後、学校帰りに立ち寄った書店の棚^{だな}にならぶ文庫本の背表紙に「宮沢賢治」の名前を見つけた。なにか、ぴぴんと感じた。その本が童話を集めた本だとはあまり意識はしていなかった。

文庫本の表紙には、「銀河鉄道の夜・風の又三郎・ポラーノの広場 ほか三篇^{ぺん}」と作品名をならべただけである。「宮沢賢治童話集」とか、「作品集」とか、本そのものの題名はない。どこことなくそっけない。ただ、カバーの絵の感じがすてきだった。緑色がかかった藍色^{あい}の中に、星や月らしきものが点々とちらばっている。

ぱらぱらとページをめくってみると、登場人物の名前が、ホモイだの、ジョバンニだの、カ

ンパネルラだの不思議な響きである。物語の中の地名も、イーハトーヴォとか、モリーオ市だの外国のように思える。なかなかおもしろそう。「銀河鉄道の夜」も「風の又三郎」も題名は聞いたことがあったが、それまで読んだこともなかった。値段は二四〇円。三十年以上前の当時の高校生のこづかいでもまあなんとかなる。さっそく買って帰り、自宅で読み始めた。

言葉づかいはやわらかい。ひらがなが多く、子どもに語りかけるような語り口は、童話だから当然なのだろう。ただ、高校二年生の胸にも、しんしんと沁みてくる孤独感がある。澄んだ寂しさがある。それから、せつないくらいに一途で純粋な願いが胸をうつ。

「銀河鉄道の夜」では、なんといつても賢治の想像力に驚かされた。一冊の小さな文庫本の中で、重いはずの汽車が宙に浮かんで、銀河をめぐる宇宙空間をがたごとと走っているではないか。

銀河鉄道をめぐった主人公のジョバンニは、友だちのカンパネルラと一緒に幸せを探している。こうと呼びかける。

「僕はもうあんな大きな暗（やみ）の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう」

なんという熱い友情の呼びかけであろうか。透きとおった美しい決意であろうか。しかし、友だちのカンパネルラは汽車の中から消えてしまう。現実には川で溺れて死んでしまうのだ。ジョバンニはひとり唇をかみしめて、壮麗な銀河を仰ぐしかない。

そこには、まわりのひとからデクノボーと呼ばれることを願った賢治の寂しさがぼんやりと

重なっているようだった。誉められもしないで、他人から苦にもされない人間になりたいと願う、慎ましい賢治の胸の奥にひろがる壮大な宇宙とそこに存在している人間の孤独を感じるこ
とができた。

それでも、宮沢賢治という人は、ひとつの大きな謎であることには変りはしない。いや、謎は
ますます深まっていった。

文庫本というのは、巻末にたいていは詳しい解説がついている。時には年譜も掲載されてい
て、たとえば、宮沢賢治がいくつの時になにをしたか、およその一生をたどることができる。
この文庫本にも年譜がついていた。宮沢賢治が自分と同じ十七歳の時になにをしていたのか、
すぐにわかる。

大正二年 一九一三年、宮沢賢治、十七歳。どんないきさつかはわからないが、寄宿舎から
追放されたとある。北海道修学旅行に行っている。ロシア文学を読んでいる。最後にさりげな
く、「この年も東北地方は記録的冷害、凶作」とつけくわえられていた。

解説は、天沢退二郎という詩人としても知られた方である。賢治の生涯と文学が、「宮沢賢
治とは誰か」と題して詳しく紹介されている。農芸化学者で、農学校の教師で、詩人であつた
賢治。科学者の精神と詩人の心をもっていた賢治。しかし、心の奥底には、東北地方の凶作に
苦しむ人々の姿に心を痛め、みんなの幸福を願い求める宗教者の魂も宿していたようだ。
宮沢賢治とはなんとも複雑で、深い宇宙をまるまる胸に抱いている人だったらしい。

高校二年生、十七歳の未熟な心は、そんな興味^{きょうみ}がだんだんと深くなっていき、文庫本の童話だけでなく、解説や年譜^{ねんぷ}もふくめて、なんどもくりかえして読んだ。

宮沢賢治と彼をめぐる言葉を、毎日、毎晩、もぐもぐと食べ続けたのだ。

あれから三十年以上が過ぎた。あの文庫本はいつたいたうなったか……。実は今も手元にある。

表紙の色は变つて、だいぶ古びたが、時々、まだ読み返してもみている。

宮沢賢治という人はいまだに謎^{なぞ}だ。詩人とか、農芸化学者とか、教師とか、肩書^{かたが}きだけでは推し測れない深淵^{しんえん}をかかえた人だ。その人が誰^{だれ}であつたのか、すつきりと理解した気にはならない。それどころか、ますます謎^{なぞ}は深まってきているように思える。うっかり宮沢賢治という深淵^{しんえん}をのぞきこんだばかりに、もう、眼をはなすことができなくなったのかもしれない。

ただ、十七歳^{さい}で宮沢賢治の本に出会つたことはとても幸運だった。宮沢賢治そのひとの存在を知つたというだけでなく、三十年以上もくりかえして読むことになる書物に出会えたことが、なによりも幸運だったと思う。

優れた書物は、子どもの時も、大人になつても、いろんなふうを読むことができる。それぞれの年齢に应じて、どんどん深くなっていき、読むたびに新しい発見がある。同時にいろんな謎を問いかけてくる。

そんな書物が、かたわらに一冊でもあれば人生はとても豊かになる。

4 たったひとつの歌でさえ

市川 森一

「おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」

「平家物語」が諭（さと）している通り、

人生には、勝者も敗者もありません。ただ一度の人生にとって大事なものは、思い出。振り返ってみて、「いい人と出会ったなア」とか、「いいものを見たなア」とか、「少しは、他者のためにいいことをしたなア」とか、それは自分だけの、だれにも知らない思い出をどれだけ持っているかということが、つまりは、「いい人生だったなア」と思えることのように思えます。

みなさんは、たとえばお風呂の中などで、無意識になにか歌を口ずさんでいるようなことがありますか？私は、むかしから「里ごころ」という童謡（どうよう）を口ずさむことがあるのですが、その歌を口ずさむと不思議に心が安らいできて、自分の全人生が素晴（すば）らしいものに思えてくるのです。

たったひとつの歌でさえ、人生を素晴らしいものにしてくれる。今回は、そんな思い出の歌にまつわる、一人の恩師のお話をさせていただきます。

それは、私がNHKの大河ドラマ「花の乱」の脚本を書いていた頃のことです。野口モモヨ先生という小学校時代の担任だった先生から、突然、一通のお手紙をいただきました。その頃、私はとうに五十歳を過ぎた壮年でしたから、モモヨ先生も八十歳に近い高齢だったはずですが、しかし、万年筆の筆跡は実に若々しく、文体もしっかりしたものでした。

内容は、私の「花の乱」を毎週楽しみに観ているという励ましに続いて、五十年ほど前の、モモヨ先生が拙宅を家庭訪問してくださった頃の話がつづられておりました。

モモヨ先生の文章を追いながら、私の脳裡には、師範学校を出て市立諫早小学校に赴任したばかりの初々しい新米先生のお姿がよみがえっていました。余談ですが、のちに映画「二十四の瞳」を観たとき、高峰秀子演じる大石先生の佇（たたず）まいが、モモヨ先生に似ているなアと思ったことがありましたが、いま思うと、昭和二十年代の小学校の女先生方は、どなたも凜（りん）と背筋を伸ばして誇り高く、みなさんが共通の使命感と慈愛に充ちた雰囲気を持っていたように思いました。

私の実家は、諫早市の栄町という商店街の一隅で戦後はカメラ店などを営んでいたのですが、私の母は、戦時中から結核を患い、一階の奥の洋間のベッドで自宅療養をしておりました。当時の結核はまだ不治の病として世間から疎まれ、七歳の私や三つ下の妹は、母の傍に近寄ることも禁じられていました。幼い兄妹にとって母とは、レースのカーテン越しに垣間見る瘠せた可哀相なマリアさまといった印象でした。

家庭訪問をして下さったモモヨ先生も、カーテン越しに母と面談したと書いてありました。モモヨ先生のお手紙には、その日の病床の母との会話がつつられていました。

「近頃、シンイチが私の愛唱歌を勝手に憶えて、遠くから歌ってくれるんですよ」

母は、モモヨ先生にそんなことを言ったそうです。

「どんな歌ですか？」と尋ねたモモヨ先生に、母は、自分は女学生のころから北原白秋の詩が好きで、病に臥せてからは、「里ごころ」の歌ばかり口ずさむようになってしまって、あるとき気づいたら、シンイチまでが歌うようになってしまったんです。あの子は音感がよかたりますね、と嬉しそうに言ったというのです。

モモヨ先生のお手紙には、病床で「里ごころ」を口ずさむ母への同情がしるされていました。

お姑さんもいらっしゃる嫁ぎ先で長患いをしている肩身の狭さから、ご実家（森長おこし本舗）のことなど思い出されて歌っていらっしゃったのではないでしょうか、と。そして、「お

母さまと一緒に泣きました」とも。

そのお手紙の最後に、「森一サンは、憶えていますか？多分、お忘れかもしれませんが、書き添えておきます」

と、その「里ごころ」の詩を書いて下さっていたのです。

笛や太鼓に さそわれて

山の祭りに来てみたが

日暮れはいやいや 里恋し

風吹きや 木の葉の音ばかり

母さま恋しと 泣いたれば

どうでもねんねよ お泊まりよ

しくしくお背戸に出て見れば

空には寒いあかね雲

雁（かり） 雁 棹（さお）になれ 前（さき）になれ
お迎（むか）ひたのむと 言うておくれ

それは、私が日頃、浴槽などで鼻歌まじりに歌っていたあの歌でした。ただその歌を、いつだれに教わったのかは不明のままで歌っていたのです。もちろん、「里ごろ」という歌のタイトルも知りませんでした。

その謎が、モモヨ先生のお手紙ですべて氷解したのでした。

さすがに、涙を禁じ得ませんでした。

薄倖のまま短い生涯を閉じた亡母への追慕の涙でもありました。しかし、それ以上に私は、五十年の歳月を越えて、一人の教え子のために、大昔の家庭訪問の小さなエピソードを忘れずにいて下さって、いまだ字が書けるうちにと、それを書き送って下さった老恩師のご恩情の深さに泣かされたのです。

日本の教育を支えたのは、モモヨ先生のような教育者の存在でした。

「二十四の瞳」の大石先生もそうでしたが、

当時の先生は、生徒のひとりひとりが背負った不幸を助けることはできないけれど、生徒と共に、一緒に泣いてやることでできたのです。生徒と一緒に泣いてやる。それが一番大事なことでということ、モモヨ先生のお手紙からふたたび教わりました。

いまでも、生徒の身になって親身に関わってくださいる先生方を私は多く知っています。生徒のみなさんには、こうした素晴らしい先生方との出会いがあることを祈ります。

人生は、出会いです。

恩師おんしとの出会い、友人との出会い、よき伴侶はんりょとの出会い、そして、たったひとつの歌でさえ、人生を豊かにしてくれることがあるということを覚えておいていただければ幸いです。

5 掲示板荒らし

Aさんは学校での普段の様子をインターネットの掲示板に書き込み、仲間との交流を楽しんでいました。授業でわかったことを書き込むとすぐに誰かが教えてくれたり、相談に乗ってくれたりしました。

そんなある日、体育大会でAさんはリレーに出場し、バトンミスをしてしまいました。その写真がインターネットの掲示板に載り、その日から、Aさんへの悪口が匿名で書き込まれるようになりました。はじめのうち、Aさんをかばってくれる書き込みもありましたが、次々と匿名のひどい書き込みが増えてきて、掲示板が悪口でいっぱいになりました。その掲示板を見たAさんは、学校を休むようになり、やがて、まったく登校することができなくなりました。

次のことについて 話し合ってみましょう

- 1 インターネットの掲示板の利点をあげてみましょう。

2 この事例の問題点をあげてみましょう。

3 書き込み^こを実名でするときと、匿名^{とくめい}でするときにはどのような気持ちの変化が起こるでしょうか。

4 掲示板^{けいじ}に自分の意見を書き込み^こ時、どのようなことに注意しなければならないでしょうか。

5 掲示板^{けいじ}で他人の意見を読む時は、どのようなことを心がけなければならないでしょうか。